慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ジョン・フランシス・ブレーの「ユートピアからの航海」について
Sub Title	On J. F. Bray's "A voyage from utopia"
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1958
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.51, No.12 (1958. 12) ,p.1085(65)- 1100(80)
JaLC DOI	10.14991/001.19581201-0065
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19581201-0065

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Reichsgut. D.A. 10 Jahrgang Heft 2. 1954 SS. 359–360.

（34） Otto P. Clavadetscher, Das churrätische Reichsgut-surbar. Z.R.G. Germ. Abt. LXX. Band. SS. 40–43.

（35） Otto P. Clavadetscher. ibid., SS. 40–41.

（36） H. Dannenbauer, a. a. O. SS. 55-56.

（37） Cap. 2, 274 : istum sacramentum iurabunt Franci homines; istum sacramentum iurabunt centenarii.

（38） H. Dannenbauer, a.a.O. S. 63.

（39） H. Dannenbauer, a.a.O. SS. 63-64.

（40） H. Dannenbauer, a.a.O. S. 64.

（41） Z.R.G. Germ. Abt. LXXIII. Band. SS. 300-360.

（42） Z.R.G. Germ. Abt. LXXII. Band. SS. 185–193.

（43） Ingomar Bog, Dorfgemeinde, Freiheit und Unfreiheit in Franken. Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik. Band 168. S. 35.

（44） Ingomar Bog, ibid., S. 39. Migne, Pat. lat. Tom. XCVII. p. 739.

（45） Bog, a.a.O. S. 39. (XI..Jh.)

（46） Bog, a.a.O. S. 40.

（47） Bog, a.a.O. S. 21.

（48） ただ Bog は Bargilden の問題に限定せぬので、Dannenbauer が十九世紀の思想と鋭く対立させた Freiheit の問題を忘却している。（万葉の防人の制度と明治の屯田兵の制度の連続性が問題となり得ぬ様に史的な両極を結合することは困難であろう。）

（49） Bog, a.a.O. S. 49.

（50） Bog, a.a.O. S. 15.

（51） H. Dannenbauer, a.a.O. S. 63.

（52） Bog, a.a.O. S. 79.

（53） fiscalische Abgabe vom Rottland. (Bog,a.a.O. S. 34)

（54） W. Metz, Zur Geschichte der Bargilden. S. 186.

（55） W. Metz, a.a.O. SS. 190-191.

（56） W. Metz, a.a.O. S. 191.

（57） W. Metz, a.a.O. S. 192.

（58） Bog, a.a.O. S. 35.

（59） W. Metz, a.a.O. S. 193.

（60） W. Metz, a.a.O. S. 193.

（61） Karl Weller, a.a.O. SS. 184, 185, 189.

（62） Karl Weller, a.a.O. SS. 180-182.

このようなシュワーベンの freie Landbevölkerung が一一六八年のバルバローサの特権状における Bargilden に等しいとすれば勿論 W. Metz のたどったフランク時代の Altfreiheit への道が開かれるだろう。フランク時代の Bargilden と同様に十三世紀の Bargilden も多様性をもつ。

ジョン・フランシス・ブレーの「ユートピアからの航海」について

飯田　鼎

一、はしがき
二、ジョン・フランシス・ブレーの生涯と思想
三、「ユートピアからの航海」の内容
四、その評価

一

十九世紀初頭のイギリスは、史上有名な産業革命の時代であり、イギリス産業資本主義の確立期でもあった。階級の分化を通じて貧富の差はますますはげしくなり、労働者階級の成熟とともに、資本の圧力に反抗する労働者階級の運動もたくましく成長しつつあった。しかしながら当時の労働者階級の多くは、今日の労働者のように機械的近代的な工場に働くプロレタリアートではなく、工場労働者の数は比較的少なかった。もちろんイングランド北部のランカシア地方などには、綿紡績工場に働く工場労働者が、十八世紀末期から十九世紀初頭にかけて次第にその数を増していたけれども、その他の広汎な地域では、技術や熟練をほこり、前近代的な意識に眠る独立小生産者がかなりの比重を占めていた。手織工、時計工、大工、印刷工、製靴工および指物師などで、彼らもやがては産業革命のまにまに工場労働者と同じくプロレタリアートにおとしいれられるべき運命にあった。すなわち、フランス革命前後から、チャーチストの時代といわれる一八三〇年代から四〇年代にかけては、階級分化がはげしくおしすすめられた疾風怒濤の時代であった。

このような時代に、社会の矛盾を身をもって体験した人々の頭脳に不合理な社会を変革しようとする社会主義思想が芽生えたのは不思議ではない。ロバート・オーエン（Robert Owen）やスペンスの社会主義思想は、このような十八世紀末期から十九世紀初頭にか

けてのイギリスにおける社会的経済的な大変動を背景として生れた。だが、隆々として発展しつつあった産業資本主義に批判的な思潮や理論は、ひとりオーエン主義やスペンス主義だけでなく、たとえばすぐれたチャーチスト指導者のひとりとして知られるブロンテア・オブライエン（Bronterre O'Brien）の如きも、独自の社会主義思想——土地社会主義——をいだいていたといわれている。そしてこれからのべようとするジョン・フランシス・ブレー（John Francis Bray）もそのひとりであるところの、リカードウ派社会主義者もまたこの時代に、社会主義思想史上に無視することのできない足跡をのこしたのである。

リカードウ派社会主義者と呼ばれている一群の思想家たち——ブルジョア経済学であるリカードウの労働価値説を、逆に資本主義制度を批判するための武器に転用した人々——については、従来あきらかにされなかったし、いまもなお明らかにされていない部分が少なくない。これらの人々に最初に注目したのは、カール・マルクスであった。けれどもリカードウ派社会主義者という名前を冠して彼らの理論を紹介批評した功績は、はるかのちの一八八〇年代、ウィーン大学教授アントン・メンガー（Anton Menger）とドイツのマルクス主義者マックス・ベアに帰せられなければならない。いわゆるリカードウ派社会主義者とは、普通に、チャールス・ホール（Charles Hall）、ジョン・グレー（John Gray）、ウィリアム・タムスン（William Thompson）、トーマス・エドモンズ（Thomas Edmonds）、ジョン・フランシス・ブレー、トーマス・ホジスキン（Thomas Hodgskin）等を指している。それにしても、これらの人々の学説や生涯について比較的くわしく論じているベアでさえも、明らかにしえない点が見出されるのは、何よりも彼らを伝える資料が散逸してしまっていることがあげられよう。その意味では、この度、M・F・ロイド・リチャード氏によって詳細な序文をつけて出版されたブレーの「ユートピアからの航海」は、きわめて貴重であり、且つ興味あるものといわなければならない。

ベアによって「フランシス・ブレーの外的生活については、彼の職業が植字工であったという事実のほかは何も知られていない」といわれた彼の生涯について、本書の序文は明らかにしてくれる。

二

ジョン・フランシス・ブレーが、リカードウ派社会主義者として記憶されるのは、その著書「労働の不当な扱いおよびその救済」（Labour's Wrongs and Labour's Remedy, 1839）によってであった。ブレーがどのような生活をおくったかは、彼がリーズの印刷工であったというほかにほとんど知られていなかった。ところが一九一六年、ジョン・エドワーズ（John Edwards）は、その年の社会主義評論（The Socialist Review）の十二月号に、ブレーの弟が彼にあてた幾通かの手紙をリーズで発見した結果、それにもとづいてブレーの生涯を一八五〇年まで明らかにすることができた。

ところが、一九三七年ミシガン州のアグネス・イングリス嬢（Miss Agnes Inglis）は、ポンティアック（Pontiac）にあったブレーの最後の住家を探索した結果、彼の息子の妻の所有になるという古いトランクが発見され、そのなかには、ブレーの著作「労働の不当な扱いおよびその救済」の彼自身による写し書きや、未刊の手記およびアメリカにおいてブレーが出版した著作や航海日記、彼が寄稿した古い新聞や、彼が関心を抱いていた著者による色々な著書が入っていたというのであって、これらのものから、いままで明らかにされなかったブレーの生涯を再現することができることとなったのである。そこでわれわれは、ロイド・リチャードが、本書に附した序文からジョン・フランシス・ブレーの興味ある生涯のごくあらましをたどることにしよう。

* * * *

ジョン・フランシス・ブレーの父は、リーズの喜劇俳優でありまた歌い手でもあった。一八〇五年アメリカに渡り、一八〇八年にワシントンでブレーの母サラ・ハント（Sarah Hunt）と結婚した。そして翌年にフランシスが生れた。その後、チャールス、エドウィンおよびエドガーの三人の弟、エンマ、フランセスという二人の妹が生れたから、彼は六人兄妹のうちの長子であった。家族はしばらくの間ボストンに住み、両親はそこの劇場の舞台に立っていた。一八二二年ブレーの父は病気になったので、家族はアメリカに残し彼はブレーをともなって英国に帰ったが、リーズに到著後二日で父は死亡した。そこでブレーの叔母が彼をひきとり、学校へやり、やがて印刷工に仕込んだのであった。

かくしてブレーの印刷工としての生活がはじまったのであるが、リーズにおいて職をみつけることができなかった彼は、町から町へと放浪をつづける渡り職人となり、その途中で、仕立職人、靴工、織工などの仕事を求めてあてどもなくさまよう職人たちと知り合ったのである。一日に二〇哩から三〇哩の道を空腹に耐えながら歩きまわったことが、彼をして現在の貧困の原因が、一体どこにあるかを知らせることとなったのであろう。一八三二年——第一次選挙法改正の年——に、ブレーはリーズに帰り、翌年ハッダースフィールドの「ウェストライディングの声」（The Voice of the West Riding）という雑誌を発行しているところに雇われたが、一八三四年にはヨークへゆき、そこで熱心に社会問題を研究しはじめたといわれる。

一八三五年の十二月から一八三六年の二月にかけて、彼は「リーズ・タイムス」に、選挙法改正をはじめ、当時の社会的政治的な矛盾を追究した四つの論文を書いた。すなわち、「運動の精神」（The Spirit of the Movement）、「政治的な原理に依存する政治的一貫性」（Political Consistency Dependent on Political Principle）、「固有の権利と獲得された権力」（Original Right and Acquired Might）、「人間の法律のための真の基礎としての人間の権

利」(Human Rights the true basis for Human Laws)であって、これらの諸論文を通じて彼は、自然法的な思想の上に立って、人間の固有の権利を強調し、政治にたいしてきびしい批判を加えたのであった。やがて一八三七年の半ばに、彼はヨークからリーズに帰り、そこで政治的な活動に参加した。すでに一八三六年にはロンドンにおいて、ロンドン労働者協会(London Working Men's Association)が建設され、いずれは労働者階級をして、大チャーチスト運動に駆りたてるべき政治的啓蒙運動を行っていた。この団体の目的は、「都市および農村の労働者階級の教養あり有力な分子を、ひとつの強固な集団に結集し、あらゆる合法的な手段を用いて、社会のあらゆる階級の人々を、平等の政治的社会的な権利を享受させるようにすること」であった。その目的を達成するためにその団体の建設者たちは、「廉価にして正直な新聞」と「つぎの世代の人々の教育」とを要求したのであった。

いわゆる「道徳派」の支配的な影響のもとに、ロンドンを中心としてはじめられたこの運動は、ウィリアム・ラヴェット(William Lovett)やヘンリー・ヴィンセント(Henry Vincent)、ジョン・クリーヴ(John Cleave)等の有能な組織者を擁していたが、丁度クリーヴとヴィンセントは、リーズにこのロンドン労働者協会と同じような団体を結成するために派遣されたのであった。この運動から影響をうけたブレーは、やがてその設立準備委員となり、間もなく、その有力な理論的指導者となったようである。すなわち（一八三七年九月二三日）リーズ・タイムス紙上に、ヨークシアの労働者にたいし、労働者協会に加入するように訴えてつぎのようにのべたといわれる。

「富の生産者たる同胞諸君よ……われわれは、普通選挙権およびそれに附属するものをも目的としてではなく手段として考える。すなわち富の生産者をして、終局的にその努力の全報酬をうけ且つ保有することができるような組織的な変化に向う第一歩として考えるのだ……。われわれは、多かれ少なかれ、われわれの権利の一部を獲得し、われわれの労働を買いいれる人々の侵害かられわれ自身を保護するために、労働組合(trade societies and trade unions)に団結している。それではわれわれは何故窮極まで同胞愛の同じ原則を実行し、広汎な政治的結社を結成することによって、われわれがそのためにたたかっている権利の一部分どころか全部を獲得してはいけないのか。」

この一節には、ブレーのリカードウ派社会主義者としての萌芽と同時に、チャーチストの一面があきらかにされている。一八三七年九月といえば、チャーチスト運動がようやく本格的に活動を開始した時期にあたり、ブレーは、リーズ労働者協会の有力な一員としてみずからこの運動に挺身したようである。

リーズ労働者協会は、一八三七年九月の終りに第一回総会を開き、その席上でブレーはつぎのような講演を行ったのであった。この一節には、チャーチストとしてリカードウ派社会主義者としての彼の色彩が、より鮮明にうき出ている。

「リーズの労働者諸君、われわれの協会は、その運命がどのようなものであれ、大衆の非常に多くの強力な団結を破滅させ且つのみこんでしまったあの大海に、今や立派にのり出そうとしているのです。これまであらゆる同様の組織の努力にともなっていた完全な失敗によって、われわれは非常に失望させられるかもしれませんけれども、最後には必ず勝つということをあきらめるべき正当な理由はありません……われわれの周囲に長い間存在し、非常に多くの悲しむべき失敗をわれわれに示している色々の政治団体や労働組合は、われわれが獲得すべき第一の目的、そしてそれなくしてはあらゆるわれわれの努力が無駄になってしまう特別の知識に、ややもすれば欠けていました……。あらゆる人々は、生きる権利と労働する権利そして彼らの労働の成果を享受する権利とをもっています、……そしてすべての人々の自然的な権利は平等なのです。」

このような思想が、のちに一八三九年、その主著「労働の不当な扱いおよびその救済」をつらぬく根本思潮となったのだといわれる。これを書くにあたって彼は、コルクホーン(Colquhoun)、ヴォルネー(Volney)、ホジスキン(Hodgskin)、スミスおよびリカードウ等から大きな示唆をうけたのであったが、とくにロバート・オーエンを非常に尊敬し、感化をうけたといわれる。この著作は、のちにマルクスによっても高く評価されたことはよく知られている。

さてブレーは、イギリスにあって、リカードウ派社会主義者として、自己の理論を構成し、思想を鍛錬しつつあったが、それと同時に、アメリカの家族との通信によって、アメリカ合衆国への関心もまた忘れなかった。彼は、弟のチャールス、エドウィンおよびエドガーからの手紙によって、アメリカの社会状勢を察知しようとしたのであって、彼がやがてその晩年に、再びアメリカへ帰り、そこで余生をおくったことと考え合せるならば、その意味を理解できるであろう。このようにして彼は、イギリスおよびアメリカ両国の社会状勢に注目しつつ、ついにわれわれがその内容を検討しようとする「ユートピアからの航海」を書き上げるに至った。この書は、のちにみるように十九世紀初頭におけるイギリス、アメリカおよびフランス、とりわけイギリス資本主義にたいする痛烈な皮肉と諷刺にみちみちており、資本主義社会の諸矛盾を非常に正しく指摘しており、まことにリカードウ派社会主義者として、マルクスの先駆者たる風格をそなえている。しかしこの注目すべき著作が、いつ書き上げられたかは必ずしも明らかではない。またあまり売れなかったため、七〇ポンドを浪費する結果になったといわれるが、大体これが出版されたのは、一八四〇年から四一年の間ではなかったかと推定される。

一八四二年頃、ブレーはアメリカ合衆国へ帰る決心をして、弟チャールスにアメリカでの印刷工の賃金について詳細をたずねたが、結局これは果さず、一時フランスに行き、それから翌一八四二年の

五月にアメリカ合衆国へ渡った。彼がフランスへ行ったその経験は、やがてその「物語」にフランスについて書かせる機会をあたえたと想われる。だが興味深いのは、アメリカでのその後の生活である。一八四二年九月までチャールズとともにボストンに滞在し、やがてミシガン州のレーピア（Lapeer）へ行って農場を買ったが、ブレーは、この農場を買うための借金を返すために印刷工として働かなければならなかった。この間に彼は結婚したが、一八四六年に彼が英国の親戚に書いた手紙によると、八〇エーカーの農場を所有し、雌牛を買い、一、二匹の豚を買うために約一五ポンドを手にいれ、失業の心配もなく、英国でよりも生活が裕かであるとのべている。ブレーが幸福な農場生活をおくった一八四二年から四八年までは、英国においては、チャーチストの第二次国民請願が失敗して、労働者階級の間にオコンナーの土地計劃に見られるような小農民への復帰、失われた農村生活への郷愁が支配した時期であり、偶然の一致とはいえ、注目すべきであろう。

オコンナーの土地計劃と同じように、彼の農民生活も失敗し、一八五一年彼の妻の実家に近いポンティアック（Pontiac）の村に新しく家を買いいれ、やがてデトロイトに行って、デトロイト・インクヮイアラー（Detroit Enquirer）という新聞に、一八五四年、それが廃刊されるまで働いた。その頃彼は、フィラデルフィアの旧友の遺産として一〇〇ポンドを譲りうけ、それによって数年来考えつづけてきたパンフレットのシリーズを発刊した。「来るべき時代」（The Coming Age）と題され、八部より成るはずのこのシリーズは、わずかに二部出されたにすぎなかったが、彼がこれによって意図したところは、「宗教的政治的および社会的改革を通じて、人類の親和と進歩に貢献すること」であったといわれる。しかし当時彼は、心霊術に没頭していたところから、このパンフレットによって心霊術を説くことが目的であったとも考えられる。われわれはここに、晩年になって心霊術に熱中したロバート・オーエンを想いうかべるならば、両者の間に興味ある対比を見出す。

一八六一年南北戦争が勃発した。このとき北部の奴隷制度反対論者が、南部の奴隷制度を攻撃したとき、つぎのような注目すべき発言を行ったといわれる。「南部の農場主の富は、まさしくこれをつくり出した奴隷のものである。それならば他の国民が経験したと同じような危機がわれわれをおそっているとき、北部の富は短時間のうちにどこからできたのであろうか」。要するに彼は黒人奴隷についてと同様白人奴隷についてもその悲惨な状態を訴えたかったのであろう。一八六五年、彼の家は火事で焼かれ、ポンティアックの近くの小さな農場で、息子たちといっしょに穀物や果物をつくって余生をすごした。とはいうものの彼のアメリカにおける執筆活動は、むしろこの晩年において、活潑であったようである。内乱における北部の勝利は、産業資本の勝利であり、資本主義の勃興とともに、労働問題も脚光をあびて登場した。一時は心霊術に耽ったブレーも、南北戦争を境とするアメリカ産業資本主義の成長とその矛盾の

展開のなかに、再び、社会主義者としての面目を発揮し、一八七三年五月、働労者の新聞「ザ・ワード」（The Word）に、つぎのような社会改造案をふくむ論文を寄稿した。これは彼の社会主義思想の側面を明らかにしていると思うので、少し長いが引用してみよう。

㈠ 現在の社会的政治的な慣例によって掠奪されている農業、機械、商業の諸階級および労働者階級よりなる大政党の結成。

㈡ この組織による国家機関の管理。

㈢ あらゆる型態の産業を、現在の雇主と従業員とより成る協同組合的な団体に次第に組織すること。

㈣ これらの団体の運営は、無利子で貸付けられる連邦通貨の援助によって著手され、あらゆる面で、合法的にとりあつかわれること。このような通貨は、この団体に独占的に貸付けられ、他のすべての通貨は撤回されること。

㈤ これらの団体は、商品を買い、売り、製造し、輸送し、個人にとって代ること。

㈥ 貨幣賃金は、現在と同じく労務の価値に応じて、あるいは高くあるいは低く、支払われるべきこと。だが最低の賃金額でも、快的な生活を営むのに充分であるべきこと。

㈦ 個人にたいして現在ゆるされている増加分もしくは利潤と呼ばれるものは、あらゆる商品の原価に加えられた割合に変更されること。そして負債の支払い、固定資本もしくは購入された資産、州および連邦課税、住宅および環境改善、教育およびその他の目的のための一般的な基金をつくること。

㈧ あらゆる税関の廃止、連邦もしくは州の如何を問わず、あらゆる課税は、真の個人的な資産について適用され、あつめられること……。

ここには社会主義者としてよりは、協同組合主義者としてのブレーを髣髴たらしめるものがあろう。しかし彼が執筆活動を通じて社会主義者たることをみずから明らかにしたのは一八七〇年代であった。彼はアメリカにあっても、イギリスに関心をいだき、オーエンやコベットの思想についても批判を加えた論説を発表し、とくに一八七四年の一月の、「ザ・ワード」にはつぎのように書いたといわれる。

「われわれすべての者は、その頭と手とをもって働き、われわれの労働を平等に交換し、安楽と享楽のための充分な蓄積を確保しなければならぬ。しかしながら、現在の社会制度のもとでは、もっともはげしく働く人々が、もっとも少ない蓄積しかもたず、現在のような金融上の混乱の場合には、キリスト教や博愛主義が苦痛の療法として工夫することのできるあらゆるものは、飢えた者にとってはいっぱいのスープにすぎない……」。

ブレーのアメリカにおけるその後の執筆活動は、ザ・ワードのほかに、ナショナル・レーバー・トリビューン（National Labour Tribune）、デトロイト・ソシアリスト（Detroit Socialist）、ウィークリ・ワーカー（The Weekly Worker）、シカゴ・ソーシャ

リスト（The Chicago Socialist）などの労働者もしくは社会主義的な新聞を中心として行われ、社会主義者としてアメリカの労働者からも高く評価されたといわれる。とくに一八七九年には、デトロイトにおける八時間労働を要求するデモンストレーションにおいて演説し、深い感銘をあたえた。

だが資本主義体制に対する痛烈な批判、その基本的矛盾にかんする具体的な把握にもかかわらず、ブレーは宗教的な影響から自由ではなかった。一八七九年「統一者としての神および人間」（God and Man a Unity and all Mankind a Unity—a basis for a new dispensation, social and religious）を書き、そのなかで、人間と一体なる神の存在を認めたのであって、これはやはりブレーの社会主義者としての限界――当時の社会主義者としてロバート・オーエンも免れなかった――を意味するものではないだろうか。これは彼の協同主義が、「資本と労働との協調」（partnership between labour and capital）としてあらわれた事実とともに、矛盾に悩むリカードゥ派社会主義そのものの性格――空想的社会主義から科学的社会主義への過渡的な型態を暗示するものではないだろうか。そしてこの点は、ブレーの革命にたいする考え方にもあらわれたのであった。

晩年のブレーの生活は、比較的平穏であったようである。一八八五年、デトロイト・ニュースは、ブレーをアメリカ合衆国に生れて現在活躍しつつあるもっともすぐれた社会主義者として、讃辞を呈したといわれる。

以上においてわれわれは、ジョン・フランシス・ブレーの生涯のごく輪廓だけを、ロイド・リチャードの研究を通じて鳥瞰することができた。リカードゥ派社会主義者が共通にもつ基本的な性格、その矛盾からブレーもまた自由ではなかった点を考察した。そこでつぎにわれわれは、新たに発見された「ユートピアからの航海」において、彼が当時のイギリス資本主義社会をどのように分析したか、この点に留意しながら読んでゆこう。

三

この物語はまず、ユートピア島からの旅人が、船が難破して、ブリドン人に救われ、この島に上陸するところからはじまる。云うまでもなく、ブリドンとは英国を暗に指しているのであるが、注意すべきことは、トーマス・モアの「ユートピア」やベーコンの「ニュ・アトランティス」あるいはモリスの「無可有郷便り」などが、あくまでも頭の中に絶海の孤島における空想的な社会の建設を画き、その紹介を通じて、現実社会を批判しているのに反し、これは主人公としての旅人の故国ユートピアについてはほとんど語らず、ブリドン（Brydone＝英国）、フランコ（Franco＝フランス）、アムリコ（Amrico＝アメリカ）という架空の国を設定し、そのなかに制度的階級的矛盾を現象せしめ、これについて痛烈な批判を加えていることである。つまり国の名前をかえてあるだけで、実際には、イギリス、フランスおよびアメリカの階級的制度的な諸矛盾を鋭く追求していることである。

まず著者は、これがほんとうの話であることを強調し、アングロ人（Anglos）の住む長さ三〇〇マイル、幅一五〇マイルの島国ブリドンに上陸する。そして関税というものが、いかに馬鹿げたものであるかを指摘し、首都ロンドド（Londo）に入って、悪い道路と雑沓と人いきれそして不潔な住宅に驚く。一方に多くの住宅を所有して巨額の利益をあげている少数の者があるのに、他方大多数の人は自分の家をもたず高い家賃を払わなければならない。「アングロス人の住居の多くは、われわれが家畜を飼っておくものよりも悪い……」（四三頁）というのである。

首都の状態とともに注目すべきは、「キン・キン」（the Kin-Kin or divine family）と呼ばれる王族に対する批判であろう。このキン・キンの囲りには一定数のアリストック（aristocs＝貴族）がおり、更にその下にはコモ（commos＝平民）から選ばれたやや多くの人々がおり、この三つの階級によってブリドンの政治は行われているのだが、キン・キンとアリストックは、世襲であって日夜逸楽に耽り、「ある者はいつもこの世のあらゆる快楽にかこまれているのに、他の者はたえず貧困と悲惨の状態にある」（四七頁）。すなわちキン・キン、アリストックスおよびコモスによって行われる政治は、実は社会の大多数をしめる真のコモスを忘れており、議会は労働する大衆の利益を無視している。またつぎの言葉はブレーがブルジョア社会における議会政治の本質を鋭くついたものとして興味深い。「ブリドンの政府の目的は、法外な税金によって人民を苦しめることであり、それはのちに、政府を構成しているアリストックスの間に分配される。彼らは、国家にたいするもっともつまらない仕事に多大な報酬をあたえ、それどころか、たびたび何にもならないことにたいして報酬を要求する」（五〇頁）。

だがブレーの政治にたいする批判は、軍隊にたいしてむけられることによって、一層鋭くなる。すなわち、人民が貴族を養うだけならば、人民の負担はさほど大きくないが、貴族をして他国の領土を侵略し、その人民から略奪させるために軍隊の費用を、人民が負担させられる（五〇頁）というのである。そしてつぎのように云う。「兵隊たちは、組織的に闘うように訓練されている。そして致命的な武器で武装されており、彼らの貴族的な支配者に有害であると想われる人に攻撃を加えるのだ……。時々、五万も六万もの兵隊たちが……お互いに何の喧嘩の原因もなく、もしくは前に知っているわけでもないのに殺到して、数時間も、わけのわからない人殺しに従事するのだ……」（五一頁）。そしてさらにつぎのように云う。「ブリドンの人々は、大体において彼らの制度に何か悪いものがあるにちがいないと感じてはいるのだが、それが何であるか、またそれがどこにあるのかわからずにいる……」。ブレーが、戦争にたいしていかにはげしい憎悪をいだいたかは、「陸に海に闘う人々をそろえておくこと、人殺しをする人々を養うために、人民からとりたてる税

金をあげることが、自分を養うことについでアングロ政府の主要な仕事であるように見える」（五一頁）といっているのをみても明らかである。これらのきびしい諷刺はブレーが生活した十九世紀初頭ではなく、二〇世紀の半ば、とりわけ昭和三〇年代のアジアの孤島に、葬られたはずの軍国主義者どもの亡霊が再びよみがえり、わがもの顔に権力をふりまわすのをあきれて見守っているお人良しの国民にたいして、もっともよく妥当する。

以上は、ブレーの基本的な態度を明らかにしたものであり、冒頭の第一章の内容であるが、第二章および第三章においては、ロンドンを中心とするイギリスの制度および風俗についてふれ、とくに警察制度について、その不合理性や非能率などが指摘されている。とくにポロ（Polo＝police＝警察）やマゴ（mago＝magistrate＝治安判事）が腐敗堕落をきわめている貴族階級の番犬と化し、罪もない大衆を苦しめていることを非難し、死刑制度の廃止を示唆している一節が見られることは注目に値する。また教会におけるペスト（pest＝priest＝牧師）の偽瞞的な態度について皮肉を交えて書いているのも興味深いものがある。しかしながら、ブレーのイギリス資本主義社会にたいする批判は、第四章および第五章に至って、ますますその鋭さとはげしさとを加える。われわれはすでに、アリストックスとコモスとの間の階級的利害について、ブレーが深い認識をもっていたことを指摘したが、ここにおいて彼は当時の階級構成をアリストックス――リド・コモス――コモスという三つの階級から成るものと規定している。リド・コモス（rido-commos）というのは、コモスつまり庶民のうちの上層部分、云いかえればブルジョアジーを意味しているようである。彼は云う。

「アリストックスとリド・コモスとは、人々が、食物を少ししかもっていないのを考慮して、いろいろなものを（アリストックおよびリド・コモスのために――筆者）つくり出そうとして進んででてくるのを知る。そこであたえられる食物は、提供される労務の価値ではないので、アリストックはその地位を維持し、リド・コモスはますます富裕になる。ついに彼は、金使いのあらい貴族から土地を買い、このようにアリストックの一員となり、かれらのすべての特権をうけることを認められるのだ」（七七―七八頁）。

ここでブレーは、労働力もまた商品となれる資本主義体制をしっかりと把握しており、とくに資本制生産が支配的な社会において、富は貨幣の形であらわされ、貨幣の所有者――もちろん貨幣は資本に転化するのであるが、彼はここでは資本という言葉を使用していない――が現存社会の支配者であることを強調する。

「アリストックとリド・コモは、貨幣をその労働の代償としてあたえる。そしてコモはその代りに、彼がみずから生産した食物や衣類の一部分をもらうために、それと交換にその貨幣の一部を返すのだ。かくして貨幣は、ひとつの階級から他の階級へうつり、コモ以外のあらゆる人々を富ませることになるのであって、貨幣こそコモから彼の生産する大部分のものをとりあげる手段なのだ……。貨幣は現在の社会制度の存続にとって、まことに欠くべからざるものである……。それは、コモが非常に重いことがわかる空気袋のピラミッドを維持し、特定の階級を彼らの同胞の負担において、愉快な人生をおくることができるようにしているのだ。それは実にすばらしい発明だ、人間の発明の才能は偉大ではないか！」（七八頁）

資本主義の社会機構にたいする何という透徹した把握そして痛烈な批判が見出されることであろうか。もちろん、さきに指摘したように貨幣は資本としてとらえられていないけれども、ここには、かのトーマス・ホジスキンにみられるような理論的な鋭利さをみるであろう。そのほか男女の不平等から来る結婚の不合理な側面、たとえば、女性の男性にたいする物質的人格的隷従を指摘し、とくに長子相続制の弊害についてのべている。長子相続制の結果は財産の不平等をもたらし、巨万の富をきわめて少数の人々が独占するという現象が生じ、富める者は偉大な権力をあたえられ、政治を支配するに至るというのである。

「あらゆる種類の支配者たちは、その大であると小であるとは問わず、たえず彼らの富のために選ばれている。ブリドンの規則や法律の主要な目的は、実際、大量に富をたくわえることであり、すでにたくさんもっている人々にたいして、さらに多くのものを得させるためのあらゆる手段をあたえることなのだ。従って、金持ちは、彼らの同胞を犠牲にして自分たちを肥らせる制度というものを、少しでも変えることにたいして、もともと反対であることが、法律をつくる人々によって、当然のこととして考えられている……。これらのすべての金持ちは、改革や改革者たちを非常におそれており、こういう人々を弾圧したり、不満な人々を処罰しもしくは処刑する法律をつくろうとつねに準備している」（八一頁）。

しかしながら、もっとも注目すべきことは、ブレーが、戦争というものの本質を洞察し、戦争がもたらす悲惨な結末、破壊、飢餓そして凌辱などについてくわしく描写していることである。そしてつぎのように結論している。

「しかしながら、つぎのことは認められなければならない。すなわちこれらの戦争の挑発者はつねにアリストックスであって、彼らこそ、戦争から利益をひき出す唯一の党派であるということなのである。従ってコモスは戦いとなれば皆出なければならないし、そのためのあらゆる費用を償わなければならない……」（八五頁）。

第五章においては、主として国家権力の問題がとりあげられ、とくに裁判制度についてその階級的な性格を暴露している。すなわち判事および検事そして治安判事などのいわゆる司法官吏が、人民の権利をまもるのではなく、支配階級の権力に忠実に奉仕するにすぎず、法律もまた支配階級の利益を擁護するように巧妙につくられていると主張する。

「アングロスは、非常に多くの成文法をもっている。それを遵

守しない者は、重刑に処せられるのである。とくにコモスはこれらの法律によって、その手足を束縛されている。しかしながら法律の多くは、ほとんど死文としてとどまっている……。だがアリストックスは、つねにこれらを専制政治の道具にしようとして準備しており、危急の際は、その全力をもってコモスをおさえようとする」（九〇―九一頁）。

しかしコモスは、必ずしもアリストックの圧迫に屈するとは限らず、彼らの不満が昂ずれば、キン・キンやアリストックやペストを打倒することがありうることをのべ、このような人民解放のための英雄的運動がおこなわれていることにふれたのち、この旅人が目撃した事件についてふれる。その事件は、貴族や僧侶の支配から英国人民を解放しようとして起ち上った革命家が、裁判の結果処刑されることになったことなのであるが、その主謀者が果して誰であるか、またその事件が具体的に何であったかについては、ここに書かれている限りでははなはだ漠然としていて明らかではない。しかしこの英雄的な人物がその死にのぞみ、専制政治の腐敗をつき、社会変革の必然性を予見し、真理の不正にたいする勝利を絶叫する声明文を三頁もついやして縷々としてのべているのをみれば、ブレーが当時のそうした蜂起に熱い共感を抱いていたことは事実であって、ここにわれわれは、体制としての資本主義のたんなる批判者ではなく、人民の権利を抑圧する国家権力にたいしてはげしい憎しみに燃えている、革命的な思想家としてのブレーの片鱗をうかがい知ることができよう。

国家の本質をみぬき、人民大衆を圧迫する専制政治に批判の矢を放ったブレーは、被圧迫民族としてのアイルランドの状態についてのべることを忘れなかった。十九世紀初頭のアイルランドの英国との関係について注目した人々は、その立場こそ異なれ、必ずしも少なくなかった。古くはサー・ウィリアム・ペティをはじめ、F・エンゲルス、マルクス、P・ギャスケル、カーライル、J・S・ミルなどがあり、最近ではハモンド夫妻が社会経済史的な立場から注目したが、ブレーもまた、社会主義者として、この問題を逃さなかった。彼はまず、独立国アイルランドが、いかにして英国の植民地的支配に服従しなければならなかったか、その過程についてふれたのち、つぎのように云う。

「エリノ（Erino＝アイルランド）のコモスは、ブリドンのコモスよりも、ずっと悪い待遇をうけている。というのは、ブリドンのアリストックスは、エリノのそれと一緒になって、エリノのコモスの掠奪に加わり、彼らに充分生活できないようにしている。非常に多くの不幸なコモスが、しばしばもっとも悲しむべき飢餓の状態におとしいれられ、あらゆる種類の食物のくずやくずの肉を食べなければならない。その結果不治の病となり、非常に多くの人々がこのようにして飢餓と病気で毎年死んでゆく。一方アリストックスは、コモスの苦悩についてはほとんど知らないし、ほとんど関心を示さないで、ブリドンにゆき、彼らが背後に残してきた飢えたみじめな人々を犠牲にして、自分の兄弟のアリストックスと、あらゆる種類の贅沢や好色に耽っているのだ……。エリノの人民は、地球上においてもっとも堕落させられたみじめな人々なのだ……」。

「エリノの人々は、温い心をもち、寛大で多くの尊敬すべき素質に恵まれているのであるけれども、アングロスにあまり好かれていない。彼らは大挙してブリドンへ渡ってきてそこに定住する。なぜならば故国でよりもブリドンの方が、よりよい生活ができるからだ……。このようにしてブリドンへエリノ人がたえず移住してきて、どんな報酬ででも働こうとしているため、ブリドンのコモスの状態をひき下げることとなる。これはアングロ人とエリノとの間に、ねたみと喧嘩をおこさせ、彼らはしばしばお互にはげしいあらそいをする。このような状態は、政府を構成するアリストックによって知られ、そして、彼らは、このような民族的な敵意の感情を、あらゆる機会に利用するのである」（一〇四―一〇五頁）。

ブレーが、この当時、アイルランド問題に注目し、その民族的な悲劇の原因が、イギリスによる植民地的支配にあることを指摘したのは、彼が社会主義者としてまれにみる慧眼を有していたことを物語るものであり、貧困におとしいれられたプロレタリアートの運命を、アイルランド問題と結びつけたことは、科学的社会主義の先駆者たるの名に恥じないであろう。

資本主義体制のもとに日に日に貧しくなり専制的な政治に悩みながらその解放を未来に期待する近代的なプロレタリアートと、被圧迫民族としてのアイルランド人のなかに、反抗者としての共通の要素を見出したブレーは、いまひとつ、同じく資本主義体制のもとに不当な扱いをうけ、虐待され堕落させられつつある者として、婦人に注目し、第六章に婦人問題を論じている。

「ブリドンおよび近隣の諸国の婦人たちは、肉体的にも精神的にも男子におとっていると、つねに教えられている。しかしながらいく人かの婦人たちは、ブリドンにおいてすばらしい知性を発揮しており、男子が賞賛しないではいられない書物を書いた……」（一〇七頁）。

婦人の権利が不当に圧迫されていることの結果、彼らの地位は低められているが、女性の能力にたいする過少評価と家庭における女子教育の軽視は、女子から生活手段を奪い、彼女らを社会の泥沼深く沈淪させることとなる。ブレーは、女性の堕落の原因が、彼女らの責任に帰することなく、深く同情している。

「アングロの婦人たちは、友達がまったくないとき、生活してゆくために売春を業とすることがよくある。まことにそれは、飢餓による死をさけるために彼女らの多くの者にのこされた唯一の手段である。多くの時代において、ブリドンには、このような不幸な女性が多勢いる……。多くの場合に、この苛酷な運命は、彼女らが予見しもしくはそれにたいして用意することができない一

連の事件によって、彼女らに課せられる。しかし彼女らが一度このような生活に入ってしまうと、そこからぬけ出る希望はほとんどない……」（一〇九頁）。

ブレーは、女性一般の運命についてそのよってきたるところを論ずるとともに、さらに、資本主義制度のもとにおける婦人問題のうちでもっとも重要なプロレタリア婦人についてつぎのようにのべている。

「このような仕方で、アリストックや富裕なコモスのために、いわゆる卑しい労働をすることによって生活をたててゆく多数の未婚のアングロスの婦人がいる。しかしながら彼女らが結婚するとき、他人のために働くことをやめると同時に、今度は夫のために同じようにあくせくと働く。男たちには、その職業において、その労働をはじめそしてやめるべき一定の時がある。しかしコモスの妻君やアリストックの婦人労働者たちは、朝起きてから夜寝るまではげしく働くのであって、どんな気晴らしや向上のための時間もほとんどない。事実彼女らの生涯は、単調な仕事の連続であって、それこそ短い間に彼女らの美しさを損うのである……」（一一四頁）。

そしてつぎのように結論する。

「しかしながらブリドンの婦人たちは、忍耐強くまた長く苦しめられているけれども、やがては、自分たちがいま屈従させられている害悪から、解放をかちとることが必要であることをさとるであろう」（一一六頁）。

ブレーはユートピア人の口をかりてこのように論じたのち、第七章において、英国の支配階級の間にみなぎる奢侈淫靡の風俗に嘲笑をあびせ、資本主義社会の基本的な矛盾とその救済策についてふれている。

「大量の機械と生産力――それらは数百万の人々の労働をなしとげる――をもつ多くの人々がいる――しかもこれらのすべての富の要素をもって、もしもそれが正しく適用されるならば、もはや望むべきものは、何物もない……。わたしはつぎのような結論に到達した。欠陥は、アングロス人の政治に関係があること――欠点は働き活動している力にあるのではなくて、その力を管理する人々の不完全な熟練と方法にあること――従って救済は社会的な力の新しい調整のなかに求められなければならない」（一二九頁）。

だがブレーは、新しい社会の建設が容易に達成し得ないものであることを指摘し、むしろ生産の無政府的な性格が、人民を益〻苦しめ、瞞す者と瞞される者の関係を明白ならしめるという。

「およそこれらすべての問題は、ブリドンにおいて相互に関係なく独立して、まったく個人の自由にまかされている。彼らはたんなる気まぐれか、もっともありうべきこととしては一定の原則に関係なく活動する……。あらゆるものにとって等しい真の基準としての労働は、しばしばまったく無価値であり且つ無視されるか、その代りに提供される何物もないのだ……。生産の問題にか

んしては、彼らはまったく暗黒のなかにある。そしてもっとも大きな疑惑や混乱が社会を支配し、いかなる人もその将来の運命が何であるか、どれぐらい長く現在の快楽を享楽しうるかわからない。非常に多くの人々が何にも生産しないで、他の人々をだましたり盗んだりすること、そして彼らの奴隷の生産物を享楽することにその時をついやす。信じられないほどの労働量や時間が年々浪費され、どんなものにもむけられず、かくして同時に、すべての人々に快い生活をおくらせるのに必要な財貨は失われるのだ」（一三三―一三四頁）。

ここにはブレーの資本主義の社会機構にたいする鋭利な分析がみられる。とくに生産の無政府的な性格と資本主義制度のもとにおいて、富がいかに浪費されているかを力説した点は、すでにマルクスの出現を予想させるものがある。

われわれは以上において、ブレーの「ユートピアからの航海」を通じて、彼の英国の社会に対する社会主義者としての鋭い洞察についてのべてきた。つぎにこの書をどのように評価するかが問題である。

四

云うまでもなくこれは、当時の英国の社会にたいする彼の率直にして大胆な批判で埋められているが、もっとも目立った特徴として、貴族政治にたいしてはげしい憎悪が集中されていることは、注意されなければならない。彼がこの書を著したのは、一八四〇年代、イギリス資本主義がすでにその産業革命を完成し、新興ブルジョア階級の政治的覇権が次第に決定的なものとなっていた頃であったとすれば、工場経営者、資本家などの言葉があまり見出されず、わずかにリド・コモスとしてあらわされているにすぎず、政治的な権力者はもっぱら貴族階級としてのアリストックとして描かれていることが、奇妙にわれわれの心をとらえる。彼が賃労働に対立するものとして産業資本そのものを認識しえないはずはないのであって、われわれはこの矛盾をどう解決すべきであろうか。けだし一八四〇年代のイギリスの産業社会には、まだ地主的土地貴族的な勢力が牢固として根をはっていたという事実――そのもっとも適切な例証として穀物法をみよ――こそ考慮されなければならないのではないか。しかしながらそれにしても産業ブルジョアジーの実力を正しく評価しない傾向がみられるのは、むしろリカードウ派社会主義そのものがもつ性格、その職人的独立小生産的性格によるのではないだろうか。しかしながらそれにもかかわらず、次第に激化してゆく階級的対立の真の原因を、はっきりと認識しており、資本主義体制が、ブルジョア階級の偽瞞と働く庶民にたいする搾取および酷使によって支えられていることを、本書のなかで絶叫してやまない点は、強調しておく必要があろう。

「ブリドンのコモスは、長い間つぎのことに気がついていた。すなわち、その政治的社会的な諸制度に何か根本的に悪いものが

あり、それが社会の特定の部分の人々に、非常に不当な負担を課し、他方、他の部分の人々は、いかなる種類の労働からもまったくまぬがれており、他の人々が勤勉によって獲得した財貨を享楽する以外に、ほとんど何もしないのだ……。彼らは自然に疑い深くなり、アリストックの多くを不信の眼をもってみるようになる」（一一七頁）。

さきにも指摘したように、支配者を貴族階級としてのみ描いており、次第に実力を伸張しつつあった産業資本家階級にあまり注意を払っていない点に問題はあるが、権力に対するはげしい憎しみは、本書の至る所に見られる。

「このようにして下ずみにされた、不幸な庶民は、その喜びにもまた悲しみにも、満腹のときにも空腹のときにも、その重荷を背負って、人生をおくる。もし彼が自分の運命の苛酷さをののしったり、もしくはそっとのろうならば、弁舌さわやかな牧師がやってきて彼の云うことをきき、苦しみこそ彼にとって好ましいものであり、それは、天国において彼に平安をもたらすものであり、これに反してもし彼が、背負っている重荷をなげとばそうとするならば、間違いなく地獄へおちるだろうと語るのだ。もし貧乏人が、高い声でののしったり呪ったりすれば、警官が棍棒で彼を撲りつけ、或は兵隊が剣や槍で彼をつきさし、騒げば厳罰に処すると云って、静かにさせるのだ」（一三〇頁）。

それから、ブレーの社会主義がもつ問題であるが、彼は要するに近代的なプロレタリアートを把握すると同時に、「圧迫された性としての婦人」、更に被圧迫民族としてのアイルランド人に注目したもっともすぐれた思想家であったことである。われわれは本書によって、リカードウ派社会主義の理論的側面とともに、思想的な面についてよりよく知ることができよう。

しかし何よりも重要なことは、ブレーが描いた一八四〇年代のイギリス社会の矛盾は、そのまま時代をかえて、われわれの時代、このわれわれ日本の社会にあてはまることである。圧迫され貧困化される勤労者大衆、被圧迫民族としてのアイルランド人、働く婦人にたいする不当な扱い、これらは、決してわれわれにとって無縁ではない。これらは実に、一世紀以上もへだてた一九五〇年代の今日、われわれの祖国、われわれの社会にとって、より一層教訓的であるといわなければならない。

*　　*　　*

本書の全貌を紹介批判しようとしたが、筆者の不手際のために、八、九、十章の部分、すなわちアメリカおよびフランスの部分については、これを割愛しなければならなかったことを附記する。

——一九五八・一〇・一四——

書評及び紹介

K・E・ボールディング『経済政策の原理』

K. E. Boulding: Principles of economic policy, 1958. pp. 434.

一

著者ボールディングは、ミシガン大学の経済学教授であり『経済分析』の著書をはじめ、財政学・厚生経済学の経済政策論の分野に、多くの著書・論文を発表している、令名高き経済学者である。その彼が、経済政策の原理なる書を著わすという。われわれの期待する所、きわめて大なるものがあった。

およそ、わが国において経済政策ほど、雑然とした分野はない。経済政策の特色を歴史的規定に求める者、経済政策を経済理論に没却させようとする者。しかしそれらの学説・討論を通じて、いかにしても切り離し得ないもの、そして多少とも経済政策の分野を志ざす者の、念頭におかざるを得ないもの——否定・肯定は別として——は、経済政策の目的とその性格にかかわる問題であろう。従来、アメリカにおいては、F・ナイトその他数人を除いて、積極的にこの問題をとりあげた論者はほとんどいない。経済政策論が経済理論の応用であるとしても、その応用の仕方にいかなる特色があるのであろうか。経済理論と経済政策との関連を説明しなくては、応用の仕方も明確ではないのである。このような問題について、ボールディングは、いかに考えるのであろうか。以下私は、ボールディングのどの部分を中心にして紹介し、わが国における経済政策論分野にどれほどの位置をしめるかを示したいと思う。

二

ボールディングが、この書に「原理」という言葉をなづけたのは、「経済政策原理」を知ることによって、賢明なる判断ができるようになる、そのような原理というものがあると考えたからにほかならない。経済政策の研究は経済学原理への入門なのであり、経済政策の原理は経済学の原理である。といって、これを知れば、すべての問題について、細かい指図が与えられるわけではない。政策分野のせまい範囲にすぎない。それでも、この案内がないよりはましであろう。現代の理論はこの案内を発展させてきているのである。このような意味で本書は、経済学原理への入門でもある。

さて、政策論は何を研究するのか。第一に目的、第二に手段、第三に主体の問題である。ところがこのうち、第一の目的が難かしい。何故なら、目的というのは倫理学の領域の問題であって、社会科学では、「正しい」という判断を下すことはできないのである。